

## 査読論文

# 大学生の起業家精神に関する研究 — アンケート調査からの考察 —

辻 周吾  
流通科学大学 商学部

## <要旨>

本研究では、大学生の起業家精神の特徴を探索する。また、大学生が起業家精神を有しない原因について考える。そのために、日本の大学生を対象に起業家精神に関するアンケート調査を実施した。また、平均値の下位項目に対し、スピアマンの順位相関分析とマン・ホイットニーのU検定を行った。その結果、大学生で「必要な知識、能力、経験」「周りの人たちの評価」「地域の起業に有利なチャンス」との項目間で、いずれも正の相関が認められた。そして、自己評価とビジネスチャンスへの関心との間に関連性があることが示唆された。さらに、「安定した収入を失うという怖れ」と「負債を抱えるという怖れ」の2項目間で正の相関が認められた。そして、収入を失う怖れと負債の怖れとの間に関連性があることが示唆された。また、女性の方が男性よりも、「必要な知識、能力、経験」など、複数の下位項目において、起業活動への態度を有しないことがわかった。

キーワード：大学生、起業家精神、グローバル・アントレプレナーシップ・モニター (GEM)

## 1. はじめに

「グローバル・アントレプレナーシップ・モニター」(Global Entrepreneurship Monitor: 以下、GEM) は、起業活動が国家経済に及ぼす影響について、各国家のデータを用いて実証研究を行い、各国の政策担当者に重要な政策方針を提供している。GEM (2023) の「総合起業活動指数」(Total Early-Stage Entrepreneurial Activity: 以下、TEA) の調査結果では、日本の起業活動が活発ではないことを表している。TEA は 6.4 であり、調査参加国 49ヶ国中で 43 位となっている。また、男性が 9.1、女性が 3.6 である。一方で、「態度」に関する調査結果では、個人における起業活動の態度が積極的でないことを表している。例えば、「事業機会認識指数」は 12.7、「知識・能力・経験指数」は 14.9 であり、いずれも 49 位となっている。以上

のことから、日本の起業活動の低調はもとより、個人における起業活動の態度の消極性も課題となっている。本研究の目的は、先行文献では情報の少ない、大学生における起業家精神の特徴について明らかにすることである。また、そのために、日本の大学生を対象に、アンケート調査を実施した。本研究の結果により、アントレプレナーシップ研究への貢献が期待できる。

## 2. 研究背景

以下、本研究テーマにかかわる先行文献をみていく。先行文献には、主に、以下のような内容のものがある。一つ目は、先の GEM を基にしたものである。二つ目は、“GUESSS” (Global University Entrepreneurial Spirit Students' Survey)<sup>1)</sup> を基にしたものである。

## 2.1. GEMに関する文献

まず、先行文献で、GEMにより、日本人の起業活動の態度について、どのように示されているのかを確認する。高橋・磯辺・本庄・安田・鈴木(2013)は、TEA全体と同様、起業活動に必要な知識・能力・経験を有していないと認識する人が多いことが、「事業機会型TEA」(他に生計の手段がありながら起業にしたもの)の低さにつながっていると主張している。さらに、鈴木(2013)も、「知識・能力・経験指数」(「新しいビジネスを始めるために必要な知識、能力、経験を持っている」とする成人人口の割合)の低さが、日本の起業計画者割合<sup>2)</sup>や、TEAの低さにつながっていると主張している。これらの研究は、日本人の、TEAなどに影響を及ぼす、「知識・能力・経験指数」の低さを指摘している。そして、このことが起業活動の態度が消極的である原因とされている。

また、みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社(2024)は、2023年の調査で、日本は、先の「知識・能力・経験指数」はもとより、「失敗脅威指数」(「失敗することに対する怖れがあり、起業を躊躇している」という成人人口の割合)や「起業活動に対する評価」に関する指数<sup>3)</sup>において、他国よりも下回っていることを主張している<sup>4)</sup>。同調査は、日本における、GEMの一般成人調査(Adult Population Survey: 以下、APS)内の「起業意識調査」によって得られた結果を報告している。日本国内の18歳から64歳までの「成人」を対象としており、その規模からも、GEMの日本版であると言える。そして、同研究から、「失敗脅威指数」や「起業活動に対する評価」に関する指数なども、起業活動の態度が消極的である原因とされている。

また、本研究における「起業家精神」とは、上記のAPS内の「起業意識調査」で扱われている、個人における起業活動の態度のことを指す。同調査では、これについて、「『態度』とは、新しい事業機会が訪れると思っているかどうかや起業家に対する評価のことをいう。それ以外には、起業リ

スクの感じ方とか、起業家としての知識・能力・経験に関連するものがある」(p.3)と述べている。なお、本文中では、説明上、「起業家精神」のことを、「起業活動の態度」のように表現する場合がある。

一方で、高橋・大驛・大月(2023)は、2001年から2021年までの、GEMにおける、日本と先進国グループのTEAの推移を分析し、日本において、年齢階級別では18~24歳が、性別分布では女性の方が、「起業態度を有しない」割合が高いことを示している<sup>5)</sup>。同研究から、起業態度を有しない割合が高いのは、年齢層で言えば、大学生に相当することがわかる。このことから、すでに大学生の時期から、起業活動の態度が消極的であると考えられる。本研究で大学生を対象としているのは、このような理由からである。しかし、GEMの先行文献では、日本の大学生を対象とした研究は少ない。

以上のように、GEMの先行文献から、日本人の起業活動の態度が消極的なものには、「知識・能力・経験指数」、「失敗脅威指数」、「起業活動に対する評価(に関する指数)」などの原因が存在するとされている。ただし、以下の点は、明らかにされていないと言える。まず、「日本人大学生のケースでは、どのような起業家精神の特徴がみられるのか?」、さらに、「日本人大学生の起業家精神は、性別などの属性により、違いがみられるのか?」ということである。そして、これらのことに一貫して、「日本人大学生が起業家精神を持たない原因は何なのか?」ということである。なお、本研究が、日本特有の大学生の起業家精神をテーマにしていることから、本文中では、「大学生」のことを、「日本人大学生」のように表現する場合がある。

## 2.2. GUESSSに関する研究

一方で、先行研究では、大学生の起業家精神に関しても、調査が行われている。“GUESSS”を基にしたものである。田路・藤村・玉井(2023)

は、2018年のGUESSSの調査データから、日本の大学生は、起業への態度か、自己効力感のどちらかが高まると、もう片方のインパクトを増大させて起業意思がより高まることを主張している。また、大学が起業を後押ししてくれる雰囲気であれば、起業意思が高まることを主張している。また、松本・柳・山田・玉井・藤村他(2025)は、2021年と2023年のGUESSSのデータを体系的に比較分析し、日本の大学生における起業意識の変化について、3つの特徴的な傾向を示している。それぞれ、「安定志向の強化が観察され、大企業志向が強まる一方、創業希望者は減少している」、「起業準備活動を『何もしていない』学生を中心に、起業に向けた具体的な行動を起こす学生が著しく減少している」、「女性の起業意思は男性の約3割という水準で推移しており、日本の場合は特に男女差が顕著である」などである。

以上のように、GUESSSの先行文献は、日本の大学生を対象としており、その起業意思、及びそれともなう行動について、全体的な傾向を示している。しかし、個人における起業家精神に焦点を当てた場合、GEMの「知識・能力・経験指数」のように、どのような態度が消極的なのかまでは分析できない。本来、この線からの分析には、GEMにおける起業意識調査の方が有効であると言える。

### 3. 研究意義、及び研究目的

しかし、先行文献では、このような起業意識の観点から、日本の大学生における起業家精神の特徴は明らかとされていない。この点から、本研究のテーマは新規性があると言える。また、ここで明らかとなったデータを基に、他の国の大学生との比較を行うことも可能である。本研究は、アントレプレナーシップ研究に関する学術的な知見を深めるものであると考えられ、学術的な意義がある。また、本研究で得られた情報は、大学におけるアントレプレナーシップ教育の在り方を考える上で、参考になるであろう。たとえば、大学生に

おける、消極的な起業活動の態度に焦点を当てた教育であり、実践的な意義がある。

以上のような背景から、本研究の目的は、日本人大学生における起業家精神の特徴を明らかにすることである。また、本研究は、大学生の起業家精神の状況や問題を理解するために行い、仮説を生成することを目的とした探索的研究である。そして、先行文献で明らかにされていない点から、以下のようなリサーチクエスチョンを設定した。

①日本人大学生における起業家精神は、どのような特徴を有しているのか？また、起業家精神を持たない原因は何なのか？

②日本人大学生における起業家精神は、性別差により、どのような特徴を有しているのか？また、起業家精神を持たない原因は何なのか？

上記の①は、大学生の起業家精神そのものについてである。さらに、②はその中での、属性による意識の差についてである。そして、以上のことを分析するために、日本人大学生に対するアンケート調査を実施した。

## 4. 研究方法

まず、質問紙調査として採用したアンケート調査の内容を説明する。その後、統計処理をはじめとする分析方法の内容を説明する。

### 4.1. 質問紙調査

アンケートの対象者は、日本全国における、18歳から22歳までの大学生である。なお、回答者が所属する大学は、それぞれ匿名となっている。2025年2月に、調査会社<sup>6)</sup>に委託し、大学生908名<sup>7)</sup>を対象に、webアンケートによる「大学生における起業家精神に関する調査」を実施した<sup>8)</sup>。アンケート調査の実施にあたり、以下のような倫理的配慮を行った。回答者に対し、同社の回答システム、及び筆者による告知文により、個人情報保護を約束する説明文を示した。回答者には、いずれの内容にも同意を得た後、回答してもらった。そして、計324件の回答を集め、回収率は29

%であった。また、有効回答は264件であり、ダミーの質問による無効回答は60件であった。さらに、筆者の質問項目を通して、「学年を、大学1回生～4回生」として、セグメントを選定した。その結果、計264件の回答を、分析のデータとして扱うこととした。なお、対象者の属性は限られており、必ずしも「日本人大学生」として一般化できないと言える。回答者の情報については、表1の通りである。

表1 回答者である大学生の属性

属性	内容	
性別	男性 (134名)	女性 (130名)
年齢	18歳 (8名)	19歳 (51名)
	20歳 (54名)	21歳 (64名)
	22歳 (87名)	
	※平均年齢20.7歳	
学年	1回生 (55名)	2回生 (57名)
	3回生 (74名)	4回生 (78名)

なお、回答者の居住地は、北海道・東北（19名）、関東（112名）、中部（36名）、近畿（65名）、中国（13名）、四国（0名）、九州・沖縄（19名）という内容である。各都道府県から、回収している形となる。

また、GEMによるアンケート調査では、みずほリサーチ & テクノロジー株式会社（2024）における「起業意識調査」にある13項目を採り入れた<sup>9)</sup>。しかし、GEMの項目のみで、起業意識の特徴の実態を明らかにするには限界がある。より幅広い内容から問う必要があると言える。そこで、筆者による13の質問項目を追加することとした。これは、GEMの項目の内容をさらに広げたものである<sup>10)</sup>。そして、質問項目を設定する際に、日本政策金融公庫 総合研究所（2024）と中小企業基盤整備機構（2024）を参考にした<sup>11)</sup>。筆者による質問項目は、下記の通りである。

①日本には、ビジネスチャンスが存在する／②あなたの起業の資質に対して、あなたの周りの人たちは評価している／③あなたは起業することに対して、安定した収入を失うことになるという怖

れがある／④あなたは起業することに対して、家族に迷惑をかけることになるという怖れがある／⑤あなたは起業することに対して、失敗して負債を抱えることになるという怖れがある／⑥あなたは、一度、起業して失敗したら、次の起業はしないほうがよいという考えである／⑦日本では、起業に要する金銭的コストが高い／⑧日本では、起業にかかる手続きが複雑である／⑨あなたは、ビジネスチャンスを発見したら、それを生かして起業する／⑩自身のキャリアとして、経営者よりも従業員として仕事をするを選ぶ／⑪起業したら、仕事と生活を調和させることは難しい／⑫あなたが起業することに対して、あなたの周りの人たちは賛成してくれる／⑬起業は、才能や資金を持った者がするものである

また、これらの13項目の回答は、「強くそう思う」、「どちらかと言えばそう思う」、「どちらとも言えない」、「どちらかと言えばそう思わない」、「まったくそう思わない」という5段階となっている<sup>12)</sup>。

#### 4.2. 分析方法

最初に、アンケート調査で収集したデータを基に、SPSS（統計分析用ソフト）を利用し、26の質問項目における平均値を算出した。

また、算出するにあたり、ここでは、個人における起業活動の態度を有するかを表すものとして、「起業家精神の志向性」という概念を設けた。そして、この概念に基づく日本人大学生の特性を測定するために、5つの回答選択肢による、「起業家精神の志向性尺度」を作成した。

そして、回答において、「強くそう思う」（5点）、「どちらかと言えばそう思う」（4点）、「どちらとも言えない」（3点）、「どちらかと言えばそう思わない」（2点）、「まったくそう思わない」（1点）のように得点化し、それをデータとして扱うこととする<sup>13)</sup>。なお、同尺度は、続く、性別差による分析にも活用する。

平均値の分析には、スピアマンの順位相関分析を用いた。その際に、平均値の低い項目は起業家

精神を有しない原因であると考え、下位5項目を選択し分析を行った<sup>14)</sup>。また、有意水準は5%未満とした。

続いて、性別差による分析には、マン・ホイットニーのU検定を用いた。男性と女性の2群間において、有意な差異が存在するかを分析した<sup>15)</sup>。その際に、平均値の下位項目について分析を行った。有意水準は5%未満とした。

## 5. 研究結果

以下では、まず、起業家精神にかかわる回答者の状況について示しておく。その上で、平均値による分析、属性による分析の順に、その結果を示す。

### 5.1. 回答者の状況

以下の、みずほりサーチ & テクノロジーズ株式会社(2024)の「起業意識調査」にある質問を行った。「過去2年以内に新たにビジネスを始めた人を個人的に知っていますか。知っている場合は、何人くらいですか?」という質問に対し、「いない(0人)」が226名(86%)、「1人」が24名(9%)、「2~4人」が11名(4%)、「5人以上」が3名(1%)であった。ビジネスを始めた知り合いがいない大学生は86%であり、大多数である。また、以下の、筆者が設けた質問を行った。まず、「あなたは、将来、起業する意思がありますか?現時点での考えを教えてください」という質問に対し、「ある」が44名(17%)、「ない」が220名(83%)であった。起業意思がない大学生は83%であり、大多数である。また、「あなたは、起業について関心がありますか?」という質問を行った。その結果、「非常に関心がある」が25名(9%)、「多少関心がある」が70名(27%)、「あまり関心がない」が65名(25%)、「まったく関心がない」が104名(39%)であった。「あまり関心がない」と「まったく関心がない」とで64%であり、起業について関心がない大学生は過半数を超えている。そして、「あなたにとって、ロールモデルとなる起業家はいますか?」という質問に対

し、「いる」が20名(8%)、「いない」が244名(92%)であった。ロールモデルとなる起業家がいらない大学生は92%であり、大多数である。

以上の結果から、日本人大学生においては、「起業人の知り合いがいない」や「起業人のロールモデルがいない」のように、起業家精神を持ちにくい状況であると言える。また、「起業意思がない」や「起業に関心がない」のように、そもそも、起業活動に目を向けていない状況であると言える。

### 5.2. 平均値

SPSSを利用し、GEMによる質問項目の平均値を算出した。また、その平均値を高い順に並べたものが、表2である。つまり、起業活動の態度を有している順である。これを平均値の低い順にみると、以下の通りである。まず、「必要な知識、能力、経験」は平均が1.79(SD = 1.09)と最も低く、大学生は、新しいビジネスを始めるために必要な知識、能力、経験を持っていると思っていない。また、「地域の起業に有利なチャンス」は平均が1.95(SD = 1.05)と2番目に低く、今後6ヶ月以内に、自分が住む地域に起業に有利なチャンスが訪れると思っていない。また、「安定した収入を失うという怖れ」は平均が2.14(SD = 1.17)と3番目に低く、起業することに対して、安定した収入を失うことになるという怖れがあると思っている。また、「周りの人たちの評価」は平均が2.17(SD = 1.13)と4番目に低く、起業の資質に対して、周りの人たちは評価していると思っていない。そして、「負債を抱えるという怖れ」は平均が2.21(SD = 1.16)と5番目に低く、起業することに対して、失敗して負債を抱えることになるという怖れがあると思っている。

その上で、上記の5項目について、それぞれの項目間の相関関係をスピアマンの順位相関分析により算出した(表3参照)。

まず、相関係数が0.7以上で有意な相関が認められたのは、「安定した収入を失うという怖れ」と「負債を抱えるという怖れ」の2項目間( $r =$

表2 各項目における平均値と標準偏差

項目	大学生 (n = 264)	項目	大学生 (n = 264)
高い地位と尊敬をもつこと	3.32 (1.09)	家族に迷惑をかけるという怖れ	2.46 (1.17)
日本でのビジネスチャンス	3.17 (1.03)	日本での起業にかかる手続き	2.45 (1.02)
社会的課題を解決するビジネス	3.13 (1.14)	創造的な人であるという考え	2.43 (1.10)
同じ生活水準であること	3.13 (1.10)	起業しての仕事と生活の調和	2.39 (1.08)
成功物語についての公共放送	2.95 (1.17)	望ましい職業選択であること	2.37 (1.05)
ビジネスチャンスの見出し	2.81 (1.21)	経営者よりも従業員での仕事	2.26 (1.13)
キャリアプランを考えた決断	2.78 (1.06)	才能や資金を持つ者がするもの	2.25 (1.09)
ビジネスチャンスの利用や活用	2.61 (1.11)	日本でビジネスを始めること	2.22 (0.98)
失敗する怖れと起業の躊躇	2.60 (1.34)	負債を抱えるという怖れ	2.21 (1.16)
周りの人たちの賛成	2.60 (0.99)	周りの人たちの評価	2.17 (1.13)
ビジネスチャンスの発見と起業	2.56 (1.18)	安定した収入を失うという怖れ	2.14 (1.17)
日本での起業の金銭的成本	2.52 (1.11)	地域の起業に有利なチャンス	1.95 (1.05)
失敗してからの次の起業	2.47 (1.15)	必要な知識、能力、経験	1.79 (1.09)

注1. ( )内は標準偏差

表3 下位項目におけるスピアマンの順位相関分析の結果

		1	2	3	4	5
1. 必要な知識、能力、経験	相関係数					
	有意確率					
2. 地域の起業に有利なチャンス	相関係数	0.522**				
	有意確率	0.000				
3. 安定した収入を失うという怖れ	相関係数	0.236**	0.133*			
	有意確率	0.000	0.031			
4. 周りの人たちの評価	相関係数	0.502**	0.482**	0.221**		
	有意確率	0.000	0.000	0.000		
5. 負債を抱えるという怖れ	相関係数	0.271**	0.116	0.708**	0.184**	
	有意確率	0.000	0.060	0.000	0.003	

\*p<.05 \*\*p<.01

0.708,  $p < 0.000$ )であった。また、相関係数が0.4以上で有意な相関が認められたのは、「必要な知識、能力、経験」と「地域の起業に有利なチャンス」の2項目間 ( $r = 0.522$ ,  $p < 0.000$ )、「必要な知識、能力、経験」と「周りの人たちの評価」の2項目間 ( $r = 0.502$ ,  $p < 0.000$ )、「地域の起業に有利なチャンス」と「周りの人たちの評価」の2項目間 ( $r = 0.482$ ,  $p < 0.000$ )であった。

以下では、相関分析の結果から、考察を行う。まず、「安定した収入を失うという怖れ」と「負債を抱えるという怖れ」は正の相関がみられ、起業

することに対し、安定した収入を失うことになるという怖れが大きいほど、失敗して負債を抱えることになるという怖れも大きくなることが示唆された。大学生は、起業することに対し、現実的な収入の喪失や負債からなる、金銭的なリスクへの不安を持っていると言える。また、これらの態度は、「失敗脅威指数」を表す「失敗する怖れと起業の躊躇」の項目とも関係する<sup>16)</sup>。起業する上での心理的な障壁となりうる。これについては、起業に関する十分な情報を有していないため、このような不安感を抱いている可能性がある。今後、いかにこの不安感を解消するかが課題となるであろう。

また、「必要な知識、能力、経験」は、「周りの人たちの評価」と正の相関を示している。新しいビジネスを始めるために必要な知識、能力、経験を持っていると認識するほど、周りの人たちは評価していると認識することが示唆された。大学生は、自身の起業にかかわる資質に対し、他者が自分をどのように評価しているかという認識も含む、ネガティブな自己評価を有していると言える。また、これは、起業する上での心理的な障壁となりうる。これについては、自身のキャリアについて、自己分析が十分に出来ておらず、本来は、起業の適性がある場合も考えられる。今後、いかにこの自己評価の低迷状態を脱するかが課題となるであろう。

さらに、「必要な知識、能力、経験」は、「地域の起業に有利なチャンス」と正の相関を示している。また、「周りの人たちの評価」も、「地域の起業に有利なチャンス」と正の相関を示している。以上のことから、新しいビジネスを始めるために必要な知識、能力、経験を持っていると認識することや、周りの人たちは評価していると認識することは、自分が住む地域に起業に有利なチャンスが訪れるという認識につながる事が示唆された。これらの起業にかかわる資質への自己評価は、地域レベルでのビジネスチャンスへの関心にまで影響していると言える。すなわち、自己評価の低さが、他の起業活動への意識にも影響している<sup>17)</sup>。

最後に、一つ目のリサーチクエスションに対し、相関分析の結果を基にした考察から、以下のような回答を示す。第一に、大学生は、起業にかかわる資質に対し、他者が自分をどのように評価しているかという認識も含む、ネガティブな自己評価を持っている。そして、こうした自己評価の低さが、他の起業活動への意識にも影響していることがわかった。第二に、起業することに対し、現実的な収入の喪失や負債からなる、金銭的なリスクへの怖れを持っていることがわかった。先行文献では、日本人の「知識・能力・経験指数」や「失敗脅威指数」の低さが指摘されているが、本

研究の結果により、日本人大学生について、具体的にどのような特徴を持っているのかを明らかにすることができた。

### 5.3. マン・ホイットニーのU検定

26項目のデータを基に、マン・ホイットニーのU検定を活用し、性別差について、有意差の有無を検討した(表4参照)。男性と女性の2群間を比較した結果、それぞれ、「地域の起業に有利なチャンス」( $p < 0.01$ )、「必要な知識、能力、経験」( $p < 0.01$ )、「日本でビジネスを始めること」( $p < 0.05$ )、「ビジネスチャンスの利用や活用」( $p < 0.05$ )、「望ましい職業選択であること」( $p < 0.05$ )、「周りの人たちの評価」( $p < 0.01$ )、「ビジネスチャンスの発見と起業」( $p < 0.01$ )、「経営者よりも従業員での仕事」( $p < 0.05$ )、「才能や資金を持つ者がするもの」( $p < 0.05$ )などに有意差を認めた。いずれも、男性が女性よりも有意に高い。

以下では、U検定の結果から、平均値の下位の項目について考察を行う。まず、下位の3項目について、男性と女性で有意差が認められた。

第一に、「地域の起業に有利なチャンス」( $p < 0.01$ )の項目について、女性は男性よりも、今後6ヶ月以内に、自分が住む地域に起業に有利なチャンスが訪れると思っていない。第二に、「必要な知識、能力、経験」( $p < 0.01$ )の項目について、女性が男性よりも、新しいビジネスを始めるために必要な知識、能力、経験を持っていると思っていない。第三に、「周りの人たちの評価」( $p < 0.01$ )の項目から、女性は男性よりも、自分の起業の資質に対して、周りの人たちは評価していると思っていない。これらの項目については、先の平均値から、大学生全体で起業活動の意識が低いものとされているが、特に女性はその特徴を有していると言える。

また、それ以外の下位の項目についても、男性と女性で有意差が認められた。まず、「日本でビジネスを始めること」( $p < 0.05$ )で、女性は男性

表4 性別差によるマン・ホイットニーのU検定の結果

項目	男性 (n = 134)			女性 (n = 130)			p 値
	平均値	中央値	標準偏差	平均値	中央値	標準偏差	
地域の起業に有利なチャンス	2.119	1.957	1.083	1.769	1.592	0.993	.003**
必要な知識、能力、経験	1.955	1.713	1.156	1.615	1.421	0.999	.004**
失敗する怖れと起業の躊躇	2.455	2.277	1.296	2.746	2.565	1.377	.090
日本でビジネスを始めること	2.373	2.306	1.031	2.062	1.968	0.904	.014*
ビジネスチャンスの見出し	2.873	2.895	1.133	2.754	2.571	1.276	.199
ビジネスチャンスの利用や活用	2.716	2.716	1.087	2.508	2.365	1.136	.047*
創造的な人であるという考え	2.478	2.453	1.046	2.377	2.294	1.163	.370
キャリアプランを考えた決断	2.776	2.771	1.001	2.785	2.768	1.127	.993
同じ生活水準であること	3.082	3.186	1.104	3.169	3.234	1.101	.571
望ましい職業選択であること	2.515	2.447	1.109	2.223	2.146	0.975	.034*
高い地位と尊敬をもつこと	3.403	3.505	1.077	3.231	3.337	1.110	.195
成功物語についての公共放送	2.985	3.076	1.163	2.923	3.041	1.172	.744
社会的課題を解決するビジネス	3.157	3.235	1.123	3.092	3.250	1.164	.836
日本でのビジネスチャンス	3.216	3.298	1.092	3.115	3.211	0.970	.422
周りの人たちの評価	2.358	2.296	1.140	1.985	1.800	1.085	.007**
安定した収入を失うという怖れ	2.142	1.912	1.184	2.139	1.923	1.153	.933
家族に迷惑をかけるという怖れ	2.493	2.346	1.181	2.431	2.297	1.168	.688
負債を抱えるという怖れ	2.254	2.075	1.200	2.169	1.977	1.128	.635
失敗してからの次の起業	2.605	2.563	1.150	2.339	2.232	1.138	.057
日本での起業の金銭的成本	2.597	2.547	1.084	2.439	2.313	1.128	.150
日本での起業にかかる手続き	2.522	2.494	1.038	2.377	2.360	0.998	.264
ビジネスチャンスの発見と起業	2.813	2.884	1.145	2.300	2.130	1.172	.000**
経営者よりも従業員での仕事	2.425	2.313	1.133	2.092	1.910	1.110	.011*
起業しての仕事と生活の調和	2.433	2.421	1.015	2.346	2.225	1.139	.332
周りの人たちの賛成	2.649	2.642	0.968	2.546	2.554	1.020	.458
才能や資金を持つ者がするもの	2.396	2.269	1.150	2.092	1.937	1.015	.031*

\*p<.05 \*\*p<.01

よりも、日本でビジネスを始めるのは簡単であると思っていない。また、「才能や資金を持つ者がするもの」(p<0.05)で、女性の方が、起業は才能や資金を持った者がするものであると思っている。また、「望ましい職業選択であること」(p<0.05)で、女性の方が、日本では、多くの人たちが、新しいビジネスを始めることが望ましい職業の選択であると考えていると思っていない。そして、「経営者よりも従業員での仕事」(p<0.05)で、女性は男性よりも、自身のキャリアとして、経営者よりも従業員として仕事をするを選ぶと思っている。

以上のように、性別差からみると、女子大学生の方が男子大学生よりも、起業活動への態度を有していないことがわかる。また、起業にかかわる

自己評価の低さや、ビジネスチャンスへの無関心をはじめ、幅広い内容でその特徴がみられる。そして、大学生全体として起業家精神を持たない原因となっている。今後、女子大学生を中心に、いかに起業活動の態度を身につけさせるかが課題である。

一方で、同じく下位の平均値である「安定した収入を失うという怖れ」と「負債を抱えるという怖れ」の項目に有意差は認められなかった。すなわち、男女ともに、起業することに対し、安定した収入を失ったり、失敗して負債を抱えたりするなどの怖れがあると思っている。これらの金銭的なリスクへの不安は、共通して抱えているものと言える。

最後に、二つ目のリサーチクエスチョンに対し、マン・ホイットニーのU検定の結果を基にした考察から、以下のような回答を示す。第一に、女子大学生の方が、幅広い内容にわたって、起業活動への態度を有していない。また、それが、大学生全体として起業家精神を持たない原因となっていることがわかった。第二に、男性も女性も、起業することに対し、安定した収入を失ったり、負債を抱えたりするなどの怖れを持っている。そして、共通してこれらの金銭的なリスクへの不安を抱えていることがわかった。先行文献では、TEAの観点から、日本人女性の方が起業家精神を有しないことが指摘されているが、本研究の結果により、日本人大学生が性別差において、どのような態度の違いを持っているのかを明らかにすることができた。

## 6. おわりに

本研究では、アンケート調査により、大学生における起業家精神の特徴を明らかにしてきた。本研究の結果は、アントレプレナーシップ研究に関する学術的な知見を深めるものであると考えられる。また、大学におけるアントレプレナーシップ教育の在り方を考える上で、参考になるものであると言える。

最後に、本研究における限界と今後の課題について述べる。一つ目は、分析方法を、平均値の大小と、平均値の属性による差に留めていることである。今後、本研究のデータを基に、因子分析を行うことを考えている。二つ目は、大学生264名の回答と、サンプルサイズの規模が小さかったことである。今後は、さらに調査を行い、サンプル数を増やすことで、大学生における起業家精神に関する理論を深め、今回の分析結果における解釈の妥当性を高めたい。

## 注

1) GUESSSは、スイスのサンガレン大学の中小企業・企業家活動研究所が事務局となり、世界

の約50ヶ国が参加して実施されている、大学・大学院生の起業意識調査である。

2) 「起業計画者割合」とは、今後3年間に、1人または複数で、自営業・個人事業を含む新しいビジネスをはじめることを見込んでいる成人人口の割合のことである。

3) GEMの「起業家という職業に対する評価」、「起業家の社会的な地位」、「メディアによる起業家への注目」など、起業家や起業活動に対する社会的な評価についてのものである。

4) 2023年度では、「知識・能力・経験指数」は、日本は12.48、中国は55.77、米国は48.99である。また、「失敗脅威指数」は、日本は42.3、中国は65.9、米国は47.8である。また、「起業活動に対する評価」に関する指数のうち、「職業選択に対する評価」の指数を例に挙げると、日本は16.4、中国は79.6、米国は79.2である。

5) 日本では、年齢階級別の特徴からみると、「起業態度を有しない」割合は、18～24歳が83.2%となっており、他の年齢階級と比べて高いという。一方で、性別分布について、女性の方が、全体に占める「起業態度を有しない」割合が高くなっているという。男女合計での割合は77.9%であるのに対して、女性は83.2%、男性は72.5%が起業態度を有していない。

6) Webアンケートは、アイブリッジ株式会社のサービス“Freeasy”を利用した。

7) 2024年8月～11月に、アイブリッジ株式会社に委託し、大学生を対象に、複数のアンケート調査を実施した。その際に、セグメント設定を、「年齢を18～22歳」、「居住地を全国」、「職業を、学生」などのようにした。さらに、質問項目を通し、セグメントとして、「学年を、大学1回生、大学2回生、大学3回生、大学4回生」の条件の回答を抽出した。本研究のアンケート調査では、その908名をモニタリストとして設定し、配布を行っている。

8) アンケート調査票の告知文で、「日本人の大学生」を対象としている旨を伝えた。

- 9) みずほリサーチ & テクノロジー株式会社 (2024)における「付属資料(Ⅱ) 2023年一般調査 (GEM2023 起業意識調査) の調査票 (日本語版)」(pp.87-92) の質問項目を参考にした。本論文における項目名と同文献における質問番号との対応は、以下の通りである。「地域の起業に有利なチャンス」(i2)／「必要な知識、能力、経験」(i3)／「失敗する怖れと起業の躊躇」(i4)／「日本でビジネスを始めること」(i9)／「ビジネスチャンスの見出し」(i11)／「ビジネスチャンスの利用や活用」(i12)／「創造的な人であるという考え」(i13)／「キャリアプランを考えた決断」(i14)／「同じ生活水準であること」(i5)／「望ましい職業選択であること」(i6)／「高い地位と尊敬をもつこと」(i7)／「成功物語についての公共放送」(i8)／「社会的課題を解決するビジネス」(i10)。
- 10) GEMの質問項目は、主に、「ビジネスチャンスの有無」「起業の資質」「起業のリスク」「起業の開始」「ビジネスチャンスと行動」「キャリアプラン」「起業家の印象」「起業に関する情報」などの内容に分けられる。筆者の質問項目は、これらの枠組みから設定している。
- 11) 筆者の③、④、⑤の項目は、日本政策金融公庫 総合研究所 (2024)にある質問項目を、②、⑦、⑧、⑪の項目は、中小企業基盤整備機構 (2024)にある質問項目を参考にした。それ以外の項目は、筆者により設定した。
- 12) GEMの「起業意識調査」にある回答の選択肢の形を採用した。しかし、「わからない」と「無回答」の選択肢は、本研究のアンケート調査では除外している。
- 13) 質問項目の内容によっては、起業家精神について、肯定的または否定的なものがある。GEMの「失敗する怖れと起業の躊躇」「ビジネスチャンスの見出し」「ビジネスチャンスの利用や活用」などの3項目、及び筆者の、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑩、⑪、⑬などの9項目は、否定的な内容であると捉えられる。これらの項目につ

- いては、その内容から、「まったくそう思わない」が、最も肯定的な回答となる。したがって、「強くそう思う」(1点)、「どちらかと言えばそう思う」(2点)、「どちらとも言えない」(3点)、「どちらかと言えばそう思わない」(4点)、「まったくそう思わない」(5点)のように得点化した。
- 14) 平均値3.00を基準とし、3.00未満を「平均値が低い」のように表現している。
- 15) 同時に、学年差についても、U検定を行った。そして、1・2回生(112名)と、3・4回生(152名)の2群間を比較した。その結果、26の質問項目のすべてにおいて、有意差はみられなかった。
- 16) 「失敗する怖れと起業の躊躇」は、「安定した収入を失うという怖れ」( $r = 0.428, p < 0.000$ )、「負債を抱えるという怖れ」( $r = 0.485, p < 0.000$ )と有意な正の相関が確認できた。また、安定収入を失うという怖れや、負債を抱えるという怖れは、失敗することに対する怖れがあり起業を躊躇しているという態度と関係することが示唆された。
- 17) 下位の5項目以外について、「必要な知識、能力、経験」は、「創造的な人であるという考え」( $r = 0.400, p < 0.000$ )、「ビジネスチャンスの発見と起業」( $r = 0.419, p < 0.000$ )と有意な正の相関が確認できた。また、「周りの人たちの評価」は、「創造的な人であるという考え」( $r = 0.470, p < 0.000$ )、「ビジネスチャンスの発見と起業」( $r = 0.494, p < 0.000$ )と有意な正の相関が確認できた。このうち、「創造的な人であるという考え」の項目は、自身の創造性に対し、他者評価はどうかといった認識を表している。これも、資質の範疇に入るものと言える。また、「ビジネスチャンスの発見と起業」の項目からも、自己評価の低さが、他の起業活動への意識にも影響していることがわかる。

## 参考文献

- ・鈴木正明 (2013) 「日本の起業活動の特徴は何か——グローバル・アントレプレナーシップ・

- モニターに基づく分析——」『日本政策金融公庫論集』、第19号、17-33頁。
- 高橋徳行・磯辺剛彦・本庄裕司・安田武彦・鈴木正明（2013）「起業活動に影響を与える要因の国際比較分析」RIETI Discussion Paper Series 13-J-015、1-34頁。
  - 高橋徳行・大驛潤・大月博司（編）（2023）『アントレプレナーシップの原理と展開：企業の誕生プロセスに関する研究』（千倉書房）。
  - 田路則子・藤村まこと・玉井由樹（2023）「大学生の起業意思形成モデルの検証」『組織科学』、56（4）、81-94頁。
  - 松本修平・柳淳也・山田仁一郎・玉井由樹・藤村まこと・山田裕美・鹿住倫世・田路則子（2025）「大学生の起業意思に関する調査レポート」『イノベーション・マネジメント』、22（0）、309-326頁。
  - 中小企業基盤整備機構（2024）「令和5年度創業意識調査 調査研究報告書」（<https://entrepreneur.smrj.go.jp/relater/2024invest.pdf>）2025年10月15日閲覧。
  - 日本政策金融公庫 総合研究所（2024）「『2023年度起業と起業意識に関する調査』～アンケート結果の概要～」（[https://www.jfc.go.jp/n/findings/pdf/kigyoushiki\\_240118\\_1.pdf](https://www.jfc.go.jp/n/findings/pdf/kigyoushiki_240118_1.pdf)）2025年10月15日閲覧。
  - みずほリサーチ & テクノロジー株式会社（2024）「起業家精神に関する調査報告書 令和6年3月」（[https://www.meti.go.jp/policy/newbusiness/houkokusyo/GEM2023\\_report.pdf](https://www.meti.go.jp/policy/newbusiness/houkokusyo/GEM2023_report.pdf)）2025年10月15日閲覧。
  - Global Entrepreneurship Monitor(GEM)(2023) “Global Entrepreneurship Monitor 2022/2023 Global Report Adapting to a “New Normal””（<https://gemconsortium.org/report/20222023-global-entrepreneurship-monitor-global-report-adapting-to-a-new-normal-2>）2025年10月15日閲覧。